山口誓子・波津女略年譜

一九〇一　明治34　11月3日、京都市上京区にて誕生。父新助・母岑子。本名新比古（ちかひこ）。
一九〇二　35　父新助の大阪転勤に伴い、外祖父脇田嘉一に託される。
一九〇六　39　10月25日、大阪市北区中之島にて誕生。父浅井義暢（よしのぶ）・母まさ。本名梅子。
一九〇九　42　父浅井義暢、大阪商船仁川支店長として赴任に伴い、朝鮮仁川（ジンセン）に渡る。
一九一一　44　母岑子没。
一九一二　45　樺太日日新聞社社長となった外祖父嘉一に迎えられ、樺太に渡る。
一九一四　大正3　樺太大泊中学校に入学。上級生と俳句の回覧雑誌「実の生るまで」を出す。父香港支店長として赴任に伴い、香港に渡る。
一九一七　6　京都府立第一中学校に転校。
一九一九　8　第三高等学校文科乙類に入学。清水谷高女に入学。大阪宰相山に移る。
一九二〇　9　京大三高俳句会に出席。指導者は鈴鹿野風呂。
「ホトトギス」に投句を始める。誓子（ちかひこ）の号を用いる。
一九二一　10　「ホトトギス」雑詠に初入選。日野草城らの「京鹿子」同人となる。
一九二二　11　はじめて高浜虚子に会う。句会で虚子が「せいし」と呼び、俳号とする。
東京帝国大学法学部独逸法律学科に入学。東大俳句会に出席。
父義暢（啼魚）「水無月句会」という家族句会を自宅で始める。
清水谷高女卒業。大手前高女高等科に入学。
一九二三　12　高文受験のため洛北鞍馬村に籠る。肺尖カタルを患い、大学を一年間休学する。
一九二四　13　肺尖カタルの診断を受ける。香櫨園に転地保養。
一九二六　15　東京帝国大学を卒業。大阪住友合資会社に入社。初めて浅井家の句会（水無月句会）に出席。
高浜虚子、浅井邸に来泊。俳号に波津女（はつじょ）を用いる。村上鬼城来泊。
「ホトトギス」課題選者となる。誓子に句の指導を受け始める。
水原秋桜子、高野素十、阿波野青畝と共に4Sと称される。外祖父嘉一没。
一九二七　昭和2　10月2日、誓子と波津女結婚。新居は波津女実家敷地内、大阪市東区宰相山町。
一九二八　3　川田順が直属の上司となる。
一九三〇　5　5月第一句集『凍港』刊。
一九三二　7　「京大俳句」が創刊され、顧問となる。
一九三三　8　満州に出張。
一九三四　9　2月『黄旗』刊。急性肺炎で重態となる。
一九三五　10　5月虚子の「ホトトギス」を離れ、水原秋桜子の「馬酔木」に加盟。
一九三七　12　父浅井啼魚急逝。
一九三八　13　9月『炎昼』刊。体調不調により、会社を長期欠勤。
一九四一　16　病気好転せず、9月、四日市市の富田にて転地療養。12月太平洋戦争始まる。
一九四二　17　9月『七曜』刊。住友本社を退職し、嘱託となる。
一九四五　20　6月空襲により宰相山町の家屋焼失。終戦。父新助没。
一九四六　21　四日市市天ヶ須賀海岸に転居。7月『激浪』刊。
桑原武夫「第二芸術論」を発表。
一九四七　22　6月『遠星』、12月『晩刻』刊。
一九四八　23　1月主宰誌「天狼」を創刊。「天狼」同人となる。
高浜虚子、誓子居を訪れ病を見舞う。鈴鹿市白子鼓ヶ浦海岸に転居。
一九四九　24　1月句集『妻』刊。
一九五一　25　5月句集『青女』刊。
一九五一　26　6月第一句集『良人』刊。
一九五五　30　1月句集『和服』刊
一九五三　28　台風13号の被害を受け、西宮市苦楽園に転居。
一九五六　31　大阪市民文化賞受賞。母まさ没。
一九五七　32　「朝日俳壇」の選者となる。昭和40年頃より、誓子と共に日本中を旅行する。
一九六二　37　3月句集『構橋』、5月句集『方位』、8月句集『青銅』刊。
一九七〇　45　香港・アンコールワットへ。以後世界各地を巡る。紫綬褒章を受ける。
一九七七　52　3月句集『一隅』、5月句集『不動』、1月より『山口誓子全集』刊行。
一九七四　49　8月第二句集『天楽』刊。
一九七六　51　勲三等瑞宝章を受ける。
一九八四　59　9月句集『雪嶽』刊。
一九八五　60　6月17日、心不全のため逝去。享年78歳。波津女の遺産を神戸大学へ寄贈。
一九八七　62　6月、芸術院賞を受ける。10月第三句集『紫玉』遺句集として刊行される。
一九八八　63　神戸大学より名誉博士号を贈られる。
一九九一　平成3　5月句集『紅日』刊。
一九九二　4　サハリン（樺太）を75年ぶりに訪れる。文化功労者顕彰。
一九九三　5　11月、「天狼」終刊を決意。
一九九四　6　3月26日、呼吸不全にて逝去。享年92歳。勲二等瑞宝章を受ける。
一九九五　7　1月17日、阪神淡路大震災にて苦楽園の家全壊。
一九九六　8　『新撰太洋』（末永山彦編）刊。
一九九七　9　3月26日、苦楽園旧居跡に句碑建立。
二〇〇一　13　1月、山口誓子記念館、誓子・波津女俳句俳諧文庫開館。